

震災復興において観光が果たすことができること

にしむらゆきお
西村幸夫
東京大学副学長・教授

震災や津波、原発事故といった不幸なできごとが続いている最中に観光のことを考えるのは、いかにも場違いに見える。それよりも先にやるべきことがあるのではないかと誰しも考えるだろう。

確かにその通りである。しかし、だからといって震災復興に直接関わらない、もしくは関わりたくても関われない分野の人間が何もなくて良いということにはならないだろう。そうだとすると観光には観光なりの役割があるといえるのではないだろうか。そのことを考えてみたい。

では、いったい観光がどのような役割を果たすことができるのか。

まず第一に、「安全」のリトマス試験紙になりえるということである。松島にしろ、平泉にしろ、古来の観光地の被害はそれほど大きくなかった。貝塚や城跡など国指定史跡のほとんどが今回の津波の被害にはあっていないという。つまり、いにしえより人は安全なところに大切なものを創ってきたのである。観光地にはこうした点で学ぶところがあると思う。つまり、施設の安全のみならず、その施設が立地する場所そのものの安全をしっかり再認識することである。この点において古来の人の営みのあとが参考になるということを経験の大震災は

教えてくれたのである。

第二に、「安心」の保障を示すことができた点である。観光地において来訪者の安全を最優先して行動した多くの観光関連事業者がいたことは、いろんなかたちで報道されてきた。安全は物理的な問題であるが、安心は文字通り心の問題である。パニックにならず、他者の誘導や指示に頼ることができるのは、その情報が確からしいという確証があるからに他ならない。日本の観光地が「安心」をもたらしてくれる態勢をさらに整えていくことがこの先の進む道であることも同時に課題として明らかになったといえるだろう。

第三に、日本社会の「安定」を内外に示すことができた点である。逆境においてもつましく穏やかな国民性は映像を通して世界中の人の琴線に響いたに違いない。これまでも日本は好感度の高い国であったが、さらに日本社会の根底にある安定したコミュニティのあり方を世界に示すことになった。これは長い目で見ると間違いなく日本のシンパを増やしたことになると思う。将来の観光にもいい影響を与えるに違いない。

ここまでは震災そのものが与えたインパクトであるが、次に復興の過程で考えられることを挙げる。

第四に、今年の『観光白書』が論じているように、観光の経済規模が地域において無視できない大きさになっているということに改めて気づかされたことがある。たとえば、三陸というと漁業が主要産業であると考えがちだが、岩手県における観光消費額は同県の、海面漁業(海面養殖業を除く)の年間産出額を数倍も上回っているのである。宮城県では、年間の観光消費額は、県内最大の出荷額を誇る食料品製造業と同第二位の電子部品製造業の年間出荷額の間にある。

第五に、こうした観光の経済規模の大きさにもかかわらず、一瞬の大災害によって非常に大きな影響を受ける産業でもあるということである。物理的な被害のみならず、風評被害もある。たとえば、東北地方の日本海側は地震の影響はわずかだったにもかかわらず、宿泊予約のキャンセルが相次ぎ、大苦戦を強いられているという。

ここから言えることは、地震直後の落ち込みはやむを得ないとして、復興過程において地域のイメージ戦略が重要であるということである。

阪神淡路大震災のあと始まった神戸ルミナリエによって震災4年後の1999年、神戸市の入り込み観光客数は震災前を上回るまでに回復したという。復興のイメージを神戸ルミナリエがうまくアピールできたからだろう。

東北はまつりや芸能の宝庫なのだから、

こうしたものの戦略的な開催や公演によって地域復興のイメージを多くの人々が共有することも重要なのではないだろうか。これはおそらく来訪者のみならず、地域に住む当事者たちにとっても大切なことのように思う。

第六に、復興のプロセスそのものを多くの人々が共有するためにも観光がなにか役割をはたすことができないだろうかという点である。東北を訪れて、東北でお金を落とすことは地域のためになる、という心証を持ってもらうためにも観光がやれることはあると考える。

地元の人々と何かが共有できるような旅のあり方というものを真剣に考える必要がある。さらには旅に出なくとも、東北の産品を購入し、応援することで地元とつながることも可能だろう。

さらにその先には、ワーキングホリデーや1日ボランティアのような形で実際に身をもって地域の役に立つという実感を持つことが旅の一部になるようなツーリズムの姿も、規模は小さいとしても、成り立ち得るのではないだろうか。こうしたことを思っている若者も少なくないはずである。

今回の大震災はとても不幸なことであったが、「安全」・「安心」・「安定」というふだんは気づきにくい大切な価値の視点をあらためて私たちに気づかせてくれたとすると、この気づきを日本人すべてが無駄にしてはいけないと痛感する。